

## III 想い出・回想

|       |           |                      |     |     |
|-------|-----------|----------------------|-----|-----|
| 旧教員   | 川喜田二郎     | 地理学の蘇生               | —   | 36  |
|       | 木村宏       | 明治校舎内研究室の思い出         | —   | 39  |
|       | 岩田慶治      | 地理学教室、そのころのこと        | —   | 43  |
|       | 小林博       | 東南アジア研究旅行            | —   | 46  |
|       | 春日茂男      | 赴任した頃の景観 断想          | —   | 48  |
|       | 中村泰三      | 地理教室の想い出             | —   | 50  |
|       | 石川義孝      | 在職中の思い出              | —   | 53  |
| 卒業修了生 | 高山龍三      | 教室一期生の思い出            | —   | 56  |
|       | 大塚隆       | 無題                   | —   | 59  |
|       | 松下任久      | 回想                   | —   | 61  |
|       | 後藤一       | 開発途上国での地形図作成         | —   | 64  |
|       | 伊藤和       | 大阪市大地理学教室開設50周年によせて  | —   | 67  |
|       | 新主寿雄      | 地理学教室創立五〇周年を迎えて      | —   | 72  |
|       | 石井寛治      | エクスカッション参加の想い出       | —   | 76  |
|       | 斎藤徹       | 学びて、未だ至らず            | —   | 77  |
|       | 橋本征治      | 大阪市大地理と私の地理歴35年      | —   | 79  |
|       | 林弘訓       | 無題                   | —   | 81  |
|       | 田畑久夫      | 近況報告                 | —   | 82  |
|       | 村田正夫      | 地理的な見方や考え方           | —   | 85  |
|       | 河岡健一      | 私の大学時代と今             | —   | 88  |
|       | 生田真人      | 19年目の小旅行             | —   | 90  |
|       | 松井一郎      | 「地理」「地理学」と私          | —   | 93  |
|       | 大町聡       | 震源の島で                | —   | 96  |
|       | 松尾光雄      | 5年間、ヤシの並木を通いづけて      | —   | 98  |
|       | 小島靖司      | あの頃の地理学教室            | —   | 100 |
|       | 松原啓介      | 135R共同研究室終焉のころ       | —   | 103 |
|       | 音田浩明      | 地理的なところ              | —   | 105 |
|       | 張志偉       | 在学中の思い出              | —   | 108 |
|       | 岡森哲也      | 地理学教室について思うこと        | —   | 110 |
|       | 島津俊之      | 厚い記憶—市大での3年半—        | —   | 112 |
|       | 新見和也      | 50周年記念覆面座談会          | —   | 115 |
|       | 青山真樹      | 「自由」の本当の価値とは～私の学生時代～ | —   | 120 |
|       | 丹羽弘一      | あの頃のこと—「謎の人」の回顧録—    | —   | 122 |
|       | 藤井奈緒子     | 地理学教室50周年によせて        | —   | 124 |
|       | 吉井(高野)美和子 | 良き思い出に変わるまで          | —   | 127 |
|       | 揚(石原)早映子  | 地理学実習、その後            | —   | 128 |
|       | 吉田容子      | 市大時代の私の思い出           | —   | 130 |
| 真中哲朗  | 吐露        | —                    | 133 |     |
| 西本拓史  | 「サロン」万歳   | —                    | 135 |     |

## 地理学の蘇生

川喜田二郎

### 1. 地理学についての私の予言。

最近私は「環境と人間と文明と」という小著を刊行した(1999, 古今書院刊)。その中(pp. 2-4)で、私は地理学がひどいスランプ状態にあり、その原因として「地理学の考え方の筋が、総合の方向を全然向いていない。」と明言している。

ところが、同じこの小著のp. 206には、「もう15年か20年ほどしたら、地理学ほど面白い学問はないという時代があり得ますよ。今の考古学みたいなもので、いっぱいマニアまで出てきて、こういう時代がじつは突然始まる可能性はあり得ると思っています。」と明言している。

私も学者の端くれ。こんな予言をするからには、学者の信用にかけて、また社会のお役に立つことを期待しての上のことである。しかしそこまで予言するからには、かなりの根拠をのべる責任がある。それらを以下にのべたい。

### 2. 3大科学方法論とその発生順。

もうかなり永い間、私は科学の主要な方法論を、書齋科学・実験科学・野外科学に3大別している。まず、現代において最も名前が売れ、社会に定着しているのは、実験科学(Laboratory Science)だろう。その前史はギリシア・イスラム文明・ルネッサンスに遡り得るとしても、文明史上本格的発足とすべきは、17世紀の西欧近代文明からだろう。

ところが、広く「学問」と呼ばれてきたものは、これよりも桁ちがいに古い。知識というものを古典として貯え、少なくとも推論を体系的に行ってきたものは、科学方法論のタイプと呼んでもよいのではない。

その起源は判らないが、西暦紀元前約三千年、シュメールという都市国家スタイルを持つ「亜文明」がおこりだした頃ではあるまいか。なぜなら、ここで文字・記録が可能になり、従って知識の蓄積・理論化・応用も可能になったからである。少なくとも西紀前1千年紀の初め頃、アッシリアの大王は既に楔形文字の図書館を持っていた。考古学者・言語学者らの努力で、その記録類の発掘・解説までかなり達成できている。

しかしこういう古い学問は、別に西アジアだけでなく、インドや中国でもおこった。特にインドのように芭蕉の葉などに書きつけたのでなく金石や竹などに文字を刻んだ中国では、このような古い科学の伝統を、今なお継り得る希望を残している。

ともあれ、このような古い亜文化に、既に地域的にいろいろのパターンがあった。これは地理学にとっても、見のがし得ない一点であろう。

それにしても、「実験科学」以前に既に存在した科学に、何か適切な総括用語はないものだろうか。それを求めて探しあぐねた私はやむを得ず「書齋科学」という用語を社会に提案したのである。



だから、日本語の「書齋科学」がオリジナルなのである。もっと適切で、歴史的慣用の権威もある用語があるのなら、私は変更するにやぶさかではない。だが、英語をオリジナルにしたがっている現代の浅はかな風潮には応じない。英語ならば「Armchair Science」とでも英訳しておけばよからうが、それよりも 에스ベラント語に権威を持たせるのが、民主主義にふさわしからう。

さて、この書齋科学の包括的な方法論とは何であろうか。大まかな特色は、古典の尊重と推論ではないか。古典に万巻の典義や四書五経やバイブルやコーランといった多様性があろうとも、先人の理論化・体系化を「学習する」という点では同じである。またインドやギリシアの論理学であろうが、漢字を活用した意味論の体系であろうが、「推論」と呼んでしまえば、一括できるのではあるまいか。

文明四千百年の眠りを破って、なぜ西欧が実験科学という偉大な創造を初めて達成したのか。それは私にとって、未だ謎である。おそらくはそれまでの旧大陸文明の文化的蓄積と、大航海時代・新大陸の発見という、とてつもないめぐりあわせの中に、その謎があるかと想像する。

ともあれ、この実験科学に宿る魂の中に、デカルトとフランシス=ベーコンという2人の大物がいた。そうして、この実験科学と既に存在した書齋科学との、方法論上の合流の上に、18世紀後半の産業革命が、本格的に始動エンジンをかけたのではないか。

だがここで、私は微妙な次の示唆を投げかけたい。

「方法序説」に象徴されるデカルトの実験科学の道は、書齋科学と合流して、夥しい「発明」を惹きおこし、資本主義・産業社会に理論的・現実的な基盤を提供したことは、まぎれもない。その「実験科学」の道は、文字通り「実験」の重視と、そこで得られたデータの「分析」の道を開拓し重視したのだ。

だがここで、日本人をも含めた現代文明人の、途方もない錯覚がやってきたのだろう。

それは、分析ということと、総合ということとは、全く方角の違う営みだということである。しかも、方角として全く異なりながら、異なるがゆえに相補いあう営みなのだ。

これがいかに誤解されているか。些か漫画的な事例を、取って御紹介しよう。私が創始した「KJ法」という科学方法論は、分析とは全く方角が異なる、創造的な総合の方法なのである。ところが、たまたまそのKJ法について取材にきたジャーナリストは、KJ法を、何か「分析」の革命的な方法だと誤解していたのである。

私は彼に忠告した。「私は『分析』といえば何だか常識以上に高級で本格的な科学的方法論のように思いこんでいる人たちに、全く違う科学的方法論、つまり『創造的総合』という全く違った、しかも凄味のある別の道があるということを訴えるために、『KJ法』を訴えざるを得なかったのです。」と。

それ程までに、KJ法を含む野外科学的方法は、まだ一般には理解されていない。いわんや、科学の一大方法論として市民権を与えられていないのである。

だが、翻って現時点の流れを見ると、この方法論は、21世紀を迎えようとするこの瞬間、遂に産声をあげ始めたのである。それは、実験室からではなく、われわれが個人としても社会としても生命の営みを演じている、生の現実から取材する。人間の心の中や対話からも、フィールドワークからも取材する。そうして、その大部分のデータは、実験科学のように定量的であるよりも、本来定性的なのである。その定性的データを、「データをして語らしめ」て、創造的に総合するのである。それは分

析とは全く趣を異にするのである。

### 3. 地理学は青春を回復する。

現場取材とKJ法とが結合して、野外科学が成立する。その方法論が全く実験科学と趣を異にするのは、実験科学が対象からなるべく「冷然と客観的に」関わろうとする「世界的」姿勢を執りたがるのに対し、野外科学はその営みを演ずる人間（「私」とか「われわれ」とか）を、この世界の一部として初めから「世界的」存在であると正直に認めている点にある。

この点で、デカルトが世界的であるのに対し、ベーコンがいつそう世界的であることは注目に値する。併せていえば、その西欧近代文明のグローバルな拡大過程で、最後の覇者が西欧の大陸部諸国でなく、経験論のベーコンの国英国であったことは、皮肉な暗示であろう。野外科学的方法は、デカルトでなくこの英国の経験論の方にいつそう親近性を持つことだろう。

ほんの数年前からのようであるが、英国を初めとする西欧諸国は、漸くKJ法の重大性に気づき始めたようである。日本ではどうか。高度経済成長期と共に迎えた「近代化」の矛盾・危機に直面し、少くとも日本の企業、そして庶民の世界は、KJ法の意味するものに気づき始めている。しかし学界や政界は、まだそれを無視し続けている。その最大理由は「欧米が認め権威づけていないから」という事大主義以外の何ものでもなかろう。

書斎科学と実験科学だけの現代文明は、単品の発明ばかりを、際限もなく生みだし始めた。しかし、創造的総合の方法を持たなかった。専門分野ごとの「いわく言い難い」名人芸としての総合で、眼前の難題をやりくりしているだけである。しかし複雑怪奇なイノベーションが、しかも幾何級数的に増大するばかりなので、遂にパンクの状態を迎えているのだ。すなわち南極オゾン層に象徴される環境公害。巨大組織に伴う管理社会化がもたらす組織公害。そして学校崩壊や〇〇教問題に示唆されるような精神公害。これらの三大公害が折り重なって到来すれば、現代文明はひとたまりもなく潰える可能性がある。

だから、一刻も早く野外科学的方法に市民権を与えねばなるまい。本来テーブルと同じく、三本足でこそ文明も安定し得るのである。そうして、これに目覚めた時、地理学は一気にその青春を取り戻すだろう。

普遍的法則の探求・活用だけが科学ではない。地域の個性探求は野外科学的方法を俟って初めて血が通うのである。住民の声を初め、山川草木の訴えはこの方法を俟ってこそ、血の通った風土の創造を達成し得るのである。その延長上にはこの世界を生命論的に捉え直す道が開けるだろう。それは決してデカルトのような無機的世界観と類を同じくしない。それは事実をして語らしめる道であり、それ故に最も民主的な道ともなり得るだろう。

再び断言して筆を措こう。地理学は突如としてその魅力的な青春を回復するだろう。

(旧教員)